

NextChallenge

高田製薬の挑戦

患児を診る外来小児科と 小児薬物療法を支える製薬技術

8月31日・9月1日、福岡市で第23回日本外来小児科学会が開催される。本学会の学会長であり、地元・福岡で小児医療の現場に携わり続けている下村小児科医院・下村国寿先生に小児医療の現状と問題点について聞いた。また、保護者にとっては悩ましい「子どもと薬」についても様々な指摘やアドバイスをいただいた。



第23回日本外来小児科学会年次集会会長
下村小児科医院院長 下村 国寿氏
しもむら・くにひさ 1979年九州大学医学部卒業
九州大学小児科勤務 国立別府病院勤務 浜の町病院勤務を経て、90年下村小児科医院開業

小児科専門医の 気つきを生かす

——小児医療の抱える問題点とは、

少子高齢化の進展とともに、20年以上も前から小児科医は減少しています。しかし、小児科医全体の数は確かに減っているのですが、小児科専門医の数はむしろ増えています。以前は内科の先生が小児科も診るといった形が一般的でしたが、やはり専門医に診察してほしいという保護者ニーズの高まりから、専門医が増加しているのです。

ただ小児医療独特の問題点も存在します。例えばこの10年ほどは、新しく小児科医になる先の半分を女性が占めています。女性が働きやすい環境をへり、受診体制を整えることはかなり難題です。

子どもは時間より夜間に体調を崩しやすい。また休日には保護者の不安心理が高まることなどから、休日夜間の診療でみる受診者の半数以上を子どもが占めています。子どもたちの健康のために24時間

あります。例えば子どもの体の様子や体重の増減などから、小児虐待やネグレクト（育児放棄）などが疑われるケースを見つけたらどうしますし、急遽センターまでそれらしい状況に遭遇することもあります。

診察室の落ち着かない様子などから発達障害の可能性に気づくこともあります。また、家庭にうつて受けとめ方のまちまちなどもの監護などについて、肥満度をチェックし、健康に与える影響を指摘して保護者に注意を喚起することもあります。

こういった小児科専門医ならではの気つきを、小児科医全体のスキルとして高めるために、学会のワークショップなどで取り上げ、知識や経験を共有し、全体のレベルアップを目指しています。

子どもを取り巻く環境づくりの指揮者に
——先生は「子どものためのコンダクターになろう」というテーマを掲げています。

コンダクターには指揮者という意味があり、子どもにとって良い環境をつくるため、先頭に立ち旗を振る人をイメージしています。

子どもも用薬の
さらなる進歩に期待
——薬自体も様々な改良を
施されているようです。

いかにいい薬でも、用法や用量を守って飲んでもらえないのも増えています。例えばドライシロップ剤は甘くて飲みやすい。散剤などの粉薬が苦手な患児に使いやすい。1回量の計量、用時振とう、雑菌混入に注意、保管に注意などが必要。用時溶解して使用するので、長期投与が可能。散剤に比べて飲みやすく工夫されたものも多く、小児向け剤形として広がっている。大きざにもよるが、粒が飲める患児には使いやすい。

最近の製薬会社の努力があったと思います。子どもにとって、また飲ませる保護者にとってもありがたいです。剤形（薬の形態）に工夫が凝らされ、飲ませやすくなったものも増えています。例えばドライシロップ剤は甘みや香りが添加され、そのままだでも飲みやすいし、水に溶かして飲むこともできます。子ども嫌がらずに服薬できます。製薬会社も薬の有効成分にフォーカスをして、苦みを感じにくくする技術の進歩には目覚ましいものがあります。

特になんての薬や抗生物質などには自己判断は禁物です。抗生物質は途中でやめてしまうと病原菌が完全に死滅せず、かえって耐性菌が発生し、さらに悪化することになりかねませんし、ぜんそくの薬は自己判断でもめるとリバウンドになり、やはり悪化するケースがあります。薬は医師の指示に従って、きちんと飲んでいただくことが肝心です。

間違った服薬方法で飲ませることも多く、これによって病気が長引いたりします。むしろ欠陥する日数は減りました。私たちが小児科医が積極的に関与することで、子どもたちに良い環境をつくり出すことができたのです。

今回の学会でも、同様に地域や職場の先頭に立ち「コンダクター」となって児童養護や小児保健の分野で成功している事例を多く紹介しました。

——服薬の回数に限りなく、子どもの薬の飲ませ方は大きく変わってきています。

例えば以前は、抗生物質などもその効果の高さから子どもの風邪などにも多用されていたのですが、したりの製薬会社の努力があったと思います。子どもにとって、また飲ませる保護者にとってもありがたいです。

剤形（薬の形態）に工夫が凝らされ、飲ませやすくなったものも増えています。例えばドライシロップ剤は甘みや香りが添加され、そのままだでも飲みやすいし、水に溶かして飲むこともできます。子ども嫌がらずに服薬できます。製薬会社も薬の有効成分にフォーカスをして、苦みを感じにくくする技術の進歩には目覚ましいものがあります。

特になんての薬や抗生物質などには自己判断は禁物です。抗生物質は途中でやめてしまうと病原菌が完全に死滅せず、かえって耐性菌が発生し、さらに悪化することになりかねませんし、ぜんそくの薬は自己判断でもめるとリバウンドになり、やはり悪化するケースがあります。薬は医師の指示に従って、きちんと飲んでいただくことが肝心です。



広告
企画・制作＝日本経済新聞社クロスメディア営業局

患者さんのために
もっと飲みやすく、ずっと使いやすく。



高田製薬

www.takata-seiyaku.co.jp
〒331-8588 埼玉県さいたま市西区宮前町203-1
TEL:048-622-2626【代表】



日本経済新聞広告企画で、
『健やかナビ』を連載中
健康な毎日を過ごしていただくための
ワンポイントアドバイス

